

- ◆目的 よい家を造るのは、結果的にはよい職人さんの判断と、技術にたよることになる。現在はコンピュータなどさまざまな機械力を駆使した設計は出来るようにはなったが、それでも最後の仕上げはやはり職人さんの腕に頼らざるをえないのである。やはりよい建物を創るのは結局は人の力と能力なのだとは私は考えている。一方江戸時代の仕事をみると、非常に丁寧である。時代の違いと云ってしまえばそれまでだが、よい仕事をしようという意欲は情熱だけでは出てこないと思う。やはり収入の点も当然問題になると思うのでそしてそこが知りたいので、表題の事にとりこんでいる。
- ◆方法 江戸時代天保8年(1837)丁酉9月に発行された「人家必用小成」高井蘭山著を中心に、銭相場、米相場、さらに奉公人給金について考察してみた。これは学術書というよりは俗書である。江戸時代の銭の質もめまぐるしく変わる上にそれにより勘定も違うので、そここのところに興味がある。
- ◆結論 江戸の貨幣経済は非常に複雑である。その上給金も殆どは盆暮2回払いである。そのため途中採用や退職の計算が非常に面倒であった。その上に閏月であるから、ますます厄介なことになった。豊かな暮らしをしていたわけでもないのに、よい仕事をする事が生きがいとなっていた。その一つは大家制度による人の管理態勢をあげる事もできる。また儒教の思想も原因しているとは思われる。その上現在のように仕事が細分化かかれていなかった事も個人がよい仕事をした原因にもあげられよう。収入ばかりが問題とはならなかったその人生観というか、そのよって来る原因を私なりに、分析し考察した。